武蔵野日曜聖書講筵

エーレック（われ往かん）
――創世記第24章――

１９７７年4月17日
小池辰雄

神はプラスで人はマイナス　十字架を受けとることが砕けの根底　イサクとイシマエル　飲め
我また汝の駱駝にも飲ましめん　われ往かん　義と愛の結びつき　信往一如

【創世記21】

6サラ言いけるは神　我を笑わしめたもう　聞く者皆我とともに笑わん……12神アブラハムに言いたまいけるは　童兒（イシマエル）のため又汝の婢（ハガル）のために之を憂うるなかれ　サラが汝に言うところの言は　悉く之を聽け　其はイサクより出る者汝の裔と称えらるべければなり……14アブラハム朝夙に起きてパンと水の革嚢とを取り　ハガルに与えて之を其肩に負わせ其子を携えて去らしめければ　彼往きてベエルシバの曠野に躑躅しが……17神其童兒の声を聞きたもう　神の使即ち天よりハガルを呼びて之に言いけるは　ハガルよ何事ぞや懼るるなかれ　神彼処におる童兒の声を聞きたまえり　18起ちて童兒を起こし之を汝の手に抱くべし　我之を大いなる国となさんと　19神ハガルの目を開きたまいければ水の井あるを見　ゆきて革嚢に水を充たし　童兒に飲ましめたり　20神童兒と偕に在す　彼遂に成長り　曠野に居りて　射　者となり……22当時アビメレクと其軍勢の長ピコル、アブラハムに語りて言いけるは汝何事を為すにも神汝とともに在す……31其処をベエルシバ（盟約の井）と名けたり……33アブラハム、ベエルシバに柳を植え永遠に在す神エホバの名を彼処に籲り

【創世記22】

20是等の事の後アブラハムに告ぐる者ありて言う　ミルカ亦汝の兄弟ナホルにしたがいて子を生めり……23ベトエルはリベカを生めり是八人はミルカがアブラハムの兄弟ナホルに生みたる者なり　24ナホルの妾名はルマという者も亦テバ、ガハム、タハシおよびマアカを生めり

【創世記23】

1サラ百二十七歳なりき是即ちサラの齢の年なり　2サラ、キリアテアルバにて死り……4我は汝等の中の寄旅なり寄居者なり

【創世記24】

1アブラハム年邁て老いたりエホバ万の事に於てアブラハムを祝みたまえり 2茲にアブラハム其凡の所有を宰る其家の年邁なる僕に言いけるは 請う爾の手を吾髀の下に置よ 3我爾をして天の神地の神エホバを指して誓わしめん 即ち汝わが偕に居むカナン人の女の中より吾子に妻を娶るなかれ 5僕彼に言いけるは 倘女我に従いて此地に来ることを好まざる事あらん時は我爾の子を彼汝が出来りし地に導き帰るべきか 6アブラハム彼に曰いけるは 汝愼みて吾子を彼処に携えかえるなかれ 7天の神エホバ我を導きて吾父の家とわが親族の地を離れしめ我に語り我に誓いて汝の子孫に此地を与えんと言いたまいし者其使を遣して汝に先だたしめたまわん 汝彼処より我子に妻を娶るべし 8若女汝に従い来る事を好まざる時は汝吾此誓を解かるべし 唯我子を彼処に携えかえるなかれ……

10斯て僕其主人の駱駝の中より十頭の駱駝を取りて出たてり 即ち其主人の諸の佳物を手にとりて起ちてメソポタミアに往きナホルの邑に至り 11其駱駝を邑の外にて井の傍に跪伏しめたり 其時は黄昏にて婦女等の水汲にいづる時なりき 12斯して彼言いけるは 吾主人アブラハムの神エホバよ願くは今日我にその者を逢わしめわが主人アブラハムに恩恵を施し給え 13我この水井の傍に立ち邑の人の女等水を汲みに出づ 14我童女に向かいて請う汝の瓶をかたむけて我に飲ましめよと言わんに 彼答えて飲め我また汝の駱駝にも飲ましめんと言わば彼は汝が僕イサクの為に定め給いし者なるべし 然れば我汝の吾主人に恩恵を施し給うを知らん 15彼語うことを終るまえに視よ リベカ瓶を肩にのせて出きたる 彼はアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルに生まれたる者なり 16其童女は観るに甚だ美しく且処女にして未だ人に適しことあらず 彼井に下り其瓶に水を盈て上りしかば 17僕はせゆきて之にあい 請う我をして汝の瓶より少許の水を飲ましめよといいけるに 18彼主よ飲みたまえといいて乃ち急ぎ其瓶を手におろして之にのましめたりしが 19飲ませおわりて言う 汝の駱駝のためにも其飲みおわるまで水を汲みて飽かしめん 20急ぎて其瓶を水鉢にあけ又汲まんとて井にはせゆき其諸の駱駝のために汲みたり 21其人之を見つめエホバが其途に幸福をくだしたもうや否やをしらんとして黙し居たり 22茲に駱駝飲みおわりしかば其人重半シケルの金の鼻環一箇と重十シケルの金の手釧二箇をとりて 23言いけるは 汝は誰の女なるや請う我に告げよ 汝の父の家に我等が宿る隙地ありや 24女彼に曰いけるは 我はミルカがナホルに生みたる子ベトエルの女なり 25又彼にいいけるは 家には藁も飼草も多くあり且宿る隙地もあり 26是に於て其人伏してエホバを拝み 27言いけるは 吾主人アブラハムの神エホバは讃美べきかな わが主人に慈恵と真実とを欠きた

まわず 我途にありしにエホバ我を吾主人の兄弟の家にみちびきたまえり……
50ラバンとベトエル答えて言いけるは 此事はエホバより出づ 我等汝に善悪を言うあたわず 51視よリベカ汝の前におる 携えてゆき彼をしてエホバの言いたまいし如く汝の主人の子の妻とならしめよ 52アブラハムの僕彼等の言を聞きて地に伏してエホバを拝めり 53是に於て僕銀の飾品金の飾品および衣服をとりいだしてリベカに与え 亦其兄と母に宝物をあたえたり 54是に於て彼およ び其従者等食飲して宿りしが朝起きたる時 彼言う 我をして吾主人に還らしめよ 55リベカの兄と母言いけるは 童女を数日の間少くも十日我等と偕におらしめよ しかるのち彼ゆくべし 57彼等いいけるは 童女をよびて其言を問わんと 58即ちリベカを呼びて之に言いけるは 汝此人と共に往くや 彼言う 往かん 59是に於て彼等妹リベカと其乳媼およびアブラハムの僕と其従者を遣り去らしめたり 60即ち彼等リベカを祝して之にいいけるはわれらの妹よ汝千万の人の母となれ汝の子孫をして其仇の門を獲しめよ
61是に於てリベカ起ちて其童女等とともに駱駝にのりて其人にしたがい往く 僕乃ちリベカを導きてさりぬ 62茲にイサク、ラハイロイの井の路より来れり 南の国に住み居たればなり 63しかしてイサク黄昏に野に出て黙想をなしたりしが目を挙げて見しに駱駝の来るあり 64リベカ目をあげてイサクを見 駱駝をおりて 65僕にいいけるは 野をあゆみて我等にむかい来る者は何人なるぞ 僕わが主人なりといいければ リベカ覆衣をとりて身をおおえり 66茲に僕其凡てなしたる事をイサクに告ぐ 67イサク、リベカを其母サラの天幕に携至りリベカを娶りて其妻となしてこれを愛したり イサクは母にわかれて後茲に慰籍を得たり

●神はプラスで人はマイナス

この間は創世記22章のお話をしたのですが、21章をちょっと開いて頂きましょうか。今日はイサクとリベカのお話になるので、イサクの誕生のことが21章に出ています。アブラハムの妻のサラ、その子供はイサク。アブラハムが100歳であり、このサラが90歳という、ちょっと常識では考えられない年輩になって、

「とても子供なんて出来そうにもありません」

とサラが笑った。ところが神さまの仰る通りに生まれてしまったわけです。6節に、

「6**サラ言いけるは 神 我を笑わしめたもう 聞く者皆我とともに笑わん**」（**創世記21・6**）

「笑う」というのは、「そんなおかしいことがあるか」と言って笑うことと、それから、「どうもやっぱりありがたい」といって喜んで笑うことと、二重の意味を持っていますが、「笑い」

というヘブライ語は「イサク」という字なんで、名前が「笑い」ということです。このイサクというのはロマ書4章に、

「1**さらば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか。**2**アブラハム若し行為によりて義とせられたらんには誇るべき所あり、然れど神の前には有ることなし。**3**聖書に何と云えるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。**」（ロマ4・1～3）

これは有名な言葉ですね。創世記15章6節にある言葉です。「アブラハムは神を信ずる」というのは、

「神にアーメンと言いました」

ということ。「信ずる」とは「アーメン」という言葉なんです。「信実（まこと）とする、本当だとする」ということです、「信ずる」というのは。だから、「アーメン」という言葉は旧約から新約まで貫いている大事な言葉です。クリスチャンが祈りの時に「アーメン」と言うのは、「それは信実（まこと）である」あるいは「信実（まこと）でありたい」と、そういう気持です。

その「アーメン」を「義と認められたり」と、「セデク」「義」とされた。「信ずる」とは神さまに「然り」ということ、自分に対しては「否」ということ。神はプラスで、人間はマイナスです。信ずるとは、あっち（神）を百％に、こっち（我）はゼロ――マイナスでもゼロでもいい――自分を空っぽにすること。これが本当の信です。

「80位信じて、こっちにも20位ありますよ」

なんていうのはダメです。そういうのは本当の力が入らない。こちら側の相対的判断がプラスであろうとマイナスであろうと、それを問題にしないと、神さまは百％にくる。これが「信ずる」ということ。そうしたら、神さまはこのマイナスを義となして、

「それでよろしい、それが本当だ」

と。こういう関係が信仰であり、また義である。「信義」という言葉はすばらしい。これが神を百％として無限大として、自分をゼロとする。そういう角度にあるのが、

「汝の聖意（みこころ）を成させ給え」

というキリストの祈りの角度なんです。そうしたらば、これが必ず成ってゆく。

「義と認められたり」という言い方は、「義認」と神学的に言う。「認める」なんていう言い方をするから観念的になってしまう。「義とする」で結構です。その信仰を義とした。

そういう信仰を本当に貫いたのはキリストの他にいないんです。だから、キリストだけが義人である。他はみんな罪びとです、自己を立てるから。「罪びと」というのは「自己を立てる者」ということです。何も、悪いことをしたとか、いいことをしたとか、そんなことではない。我執、己を立てるのが「罪びと」ということです。

●十字架を受けとることが砕けの根底

「4**それ働く者への報酬（むくい）は恩恵（めぐみ）といわず、負債（おいめ）と認められる。5されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたもう神を信ずる者は、その信仰を義と認めらるるなり。**」（ロマ４・４～５）

「敬虔ならぬ者を義としたもう神」

というのは、素晴らしい言い方です。いわゆる信心深くも何でもない者を義とする神、ということは、どういうことかと言うと、要するに「砕けの魂」です。砕けの魂を義とする。

「もう仕様がありません、私は」

と言って自分を投げ出している。それを神さまは義とするんです。

「私はだいぶん信心深くなってきました。敬虔であります」

と。敬虔であるということは悪いことじゃないですよ。結構なことなんだけれども、まだそういう相対的なことを問題にしているうちはダメです。この世界は次元が高いですからね。もう自分は平伏して、砕けて、もうこれ以上の砕けが無いというところにくる。「これ以上の砕けが無い」なんていうことは手放しではできないですよ、人間は。

その砕けはキリストの十字架なんです。キリストの十字架が本当に私たちの砕けざるところの不徹底な心を、徹底的に砕けへ持ってきた。これが砕けの姿です。自分を本当に十字架上で砕いてしまった。それで砕けざる罪の贖いをキリストがやってしまった。そのキリストの十字架を受けとることが砕けの魂の根底なんです。それが本当の意味の敬虔になる。「敬虔ならぬ者」というのをただ相対的な意味において肯定しているのではない。

「敬虔ならぬ者は、本当に仕様がないやつだ」

と、そのことに自分で気がつかなくてはいかん。それが即ち砕けに来るわけですね。

「6**ダビデもまた行為なくして神に義と認めらるる人の幸福（さいわい）につきて斯く云えり。**

「行為なくして」といっても、人間は大いに行為をよくしようと努力することは結構なんだけれども、しかしながら、ある処まで行って、行き詰まってしまう。

曰く、7『不法を免（ゆる）され、罪を蔽（おお）われたる者は幸福（さいわい）なるかな、8主が罪を認め給わぬ人は幸福なるかな』（ロマ４・６～８）

有名な詩篇32篇です。ちょっと32篇を開いてください。

「1**その愆（とが）をゆるされその罪をおおわれしものは福（さいわ）いなり　2不義をエホバに負わせられざるもの心にいつわりなき者はさいわいなり**」（詩篇32・１～２）

これはアウグスティヌスが大好きだった句です。アウグスティヌスはさんざん迷ったり、悪い事をしたり、いろいろありましたから、

「その愆をゆるされその罪をおおわれしものは幸福なり」

と。まぁみんな人間は本当はそうなんです、ダメなんです。

「9**されば此の幸福はただ割礼ある者にのみあるか、また割礼なき者にもあるか、**

ユダヤ人の洗礼みたいなのが割礼というものですね、宗教的な一つのしるしです。

我らは言う『アブラハムはその信仰を義と認められたり』と。」（**ロマ４・９**）

まぁとにかくアブラハムは、まだ律法もない時に「信仰によって義とされた」ということを言おうとしている。私は4章を引っ張ったのは、イサクが約束の子、恵みの子であるということを言おうとして、ここに引用しているわけです。19節、

「19**かくて凡そ百歳に及びて己が身の死にたるがごとき状（さま）なると、サラの胎の死にたるが如きとを認むれども、**

即ちサラは90歳ですからね、

その信仰よわらず、20不信をもて神の約束を疑わず、信仰により強くなりて神に栄光を帰し、21その約し給えることを、成し得給うと確信せり。」（**ロマ４・19～21**）

「約束」ということは創世記15章に出ているように、夜空を見て神様はアブラハムに、

「**あの星々が数えられるか？**」

と聞いた。

「**あの星々は数えられません**」

とアブラハムが答えた。だけど、

「**お前の子孫はこの星々のようにたくさんになるぞ**」

と。アブラハムはもう年とっているし、サラも年とっていて、とてもそんなことは考えられない。けれども、アブラハムは神さまの言葉だから、これを信じた。そうしたら、神はこれを義とした、というさっきの話。即ち神さまは、

「アブラハムに子供を与える」

と。与えられそうもないのに「子供を与える」とおっしゃった。それを信じた。「与える」とおっしゃったのは神さまの約束なんです。イサクは約束の子なんです。

「その約束の子を今度は献げろ」

と言った。人身御供（ひとみごくう）みたいに。創世記22章。せっかくこれから子々孫々ができるというこの子供を献げろとは何事かと思ったんだけれども、アブラハムはまた黙ってこれを実行した。そうして危うくイサクを屠ろうとした。そうすると、

「アブラハムよ、アブラハムよ、お前の信仰は本ものだ。私は他に献げ物の羊を用意している」

と。いわゆる御利益信仰じゃないと。そういうことでもってアブラハムは信仰を貫いたわけです。

「こちらの幸福（さいわい）とか禍（わざわ）いとかいうことじゃない。神さまの聖意を徹底的に受けとっ

ていこう。それがたとえ禍いであってもいいんだ」というような角度が本当の信というもの。約束は必ず神さまは成就する。

即ち、イサクが約束の子であるということをロマ書4章でもって言っている。死んだような現実、絶望的現実にもなお望みを失わない。神さまの約束を信じ抜く。イサクというのはそういう約束の子であるということをパウロはロマ書4章で言っているわけです。それが4章17節から22節あたりまでがそうですね。

●イサクとイシマエル

ところが、話がちょっとずれますけれども、アブラハムとサラの子イサクは約束の子だけれども、アブラハムとハガルの子イシマエルは約束の子ではない。パウロはまたこれをガラテヤ書4章で、前者を新約的存在、後者を旧約的存在というようにとって言っているわけです。イシマエルのことが創世記21章のところに出てくる。

12 **神アブラハムに言いたまいけるは 童兒（イシマエル）のため又汝の婢（ハガル）のために之を憂うるなかれ サラが汝に言うところの言は悉く之を聽け 其はイサクより出る者汝の裔と称えらるべければなり**

イサクから出る者、即ちこれが本当の正統な裔であると。それでサラは「ハガルを追い出してください」と。女性が二人いることはうまくないわけです。ハガルはイシマエルを連れて曠野に行ってしまう。そのことは創世記21章14節以下に出ている。

14 **アブラハム朝夙に起きてパンと水の革嚢とを取り ハガルに与えて之を其肩に負わせ其子を携えて去らしめければ 彼往きてベエルシバの曠野に躑躅しが**

と、ずっと南の方です。革袋の水が尽きてしまった。子を灌木の下に置いて、「我が子の死ぬのを見るに忍びず」と言って泣いていた。

「声をあげて泣く」

と書いてある。ところが、

17 **神其童兒の声を聞きたもう 神の使即ち天よりハガルを呼びて之に言いけるはハガルよ何事ぞや懼るるなかれ 神彼処におる童兒の声を聞きたまえり** 18 **起ちて童兒を起こし之を汝の手に抱くべし 我之を大なる国となさんと** 19 **神ハガルの目を開きたまいければ水の井あるを見 ゆきて革嚢に水を充たし 童兒に飲ましめたり**

と。そこに泉が湧いていた。

20 **神童兒と偕に在す 彼遂に成長り 曠野に居りて射者となり**

神さまは、約束の子ではないけれども、イシマエルももちろん憐れんで、そしてそれが弓射る者の先祖となったというようなことが書いてある。

今度は「ベエルシバの誓い」というのがありましてね、22節から、

22 **当時アビメレクと其軍勢の長ピコル、アブラハムに語りて言いけるは汝何事を為すにも神汝とともに在す**

これは大事な言葉です。

「汝何事を為すにも神汝とともに在す」

「神汝と偕に在すがゆえに汝何事をも為せる」と、逆に読んでいい言葉です。そういうことがずっと書いてありまして、31節に、

31 **其処をベエルシバ（盟約の井）と名けたり**

「ベエル」という言葉は井戸、「シェバー」は「盟約の井」ということ。それはアブラハムとアビメレクとの約束の意味でもって「盟約の井」ということがここにちょっと書いてある。

33 **アブラハム、ベエルシバに柳を植え永遠に在す神エホバの名を彼処に籲り**

これもちょっと注目すべき節です。「ヤーヴェー」という名がアブラハムから出ている。大体普通はモーセからと言われていますが、この物語にはアブラハムからもう既にそのことが言われている。神の名「エホバ」というのは「ヤーヴェー」という「存在する」という意味です。存在者、実在者、実存者です。「ハーヤー」という言葉から来る。まぁちょっと、それだけのことを先に言っておかないと。それから22章はこの前やりましたから、今日は23章にいくわけですが、その前に22章20節から、その前段が出ている。

20 **是等の事の後アブラハムに告ぐる者ありて言う ミルカ亦汝の兄弟ナホルにしたがいて子を生めり**

「ナホル」というのはアブラハムの弟、ナホルの奥さんがミルカ、ナホルとミルカの間にベトエルというのができて――まだ他にたくさんいます――ベトエルという人の子供にラバンとリベカというのがいる。

23 **ベトエルはリベカを生めり是八人はミルカがアブラハムの兄弟ナホルに生みたる者なり** 24 **ナホルの妾名はルマという者も亦テバ、ガハム、タハシおよびマアカを生めり**

昔は妾だとかいろいろいたわけです。

1 **サラ百二十七歳なりき是即ちサラの齢の年なり** 2 **サラ、キリアテアルバにて死り**

アブラハムの奥さんのサラは127歳で死んだ。カナンの地のヘブロンであった。サラのために哀しみ泣いたと。そこでアブラハムはカナンの地では、

4 **我は汝等の中の寄旅なり寄居者なり**

この言葉は新約にも出てきますが、カナンというのはパレスチナのもとの先住民族の名前です。カナーン民族。先住民族のカナーン、今のパレスチナ、そこが神さまが約束した約束の地なんだ。であるけれども、「旅人、寄寓者である」という言い方をしているわけです。そこでアブラハムはイサクのために奥さんを考えなくてはならないことになった。しかし

ながら、異邦のカナーンの地からは女性を捜してはいかんと。

●飲め我また汝の駱駝にも飲ましめん

24章にいきますと、

1アブラハム年邁(としすすみ)て老いたり エホバ万(すべて)の事に於てアブラハムを祝(めぐ)みたまえり 2茲(ここ)にアブラハム其凡(すべて)の所有(もちもの)を宰(つかさど)る其家の年邁(としより)なる僕に言いけるは 請う爾(なんじ)の手を吾髀(わがもも)の下に置(いれ)よ

というのは、誓いの時にこういうやり方をするらしいね、向こうでは。

3我爾をして天の神地の神エホバ

天地の神であるところのヤーヴェー、

を指して誓わしめん 即ち汝わが偕に居(す)むカナン人の女(むすめ)の中より吾子(わがこ)に妻を娶(めと)るなかれ

カナン人からそういうのを選んではいかん。もとの故郷の方へ行ってもらいたいと。ハランの方ですね。ハランに大分いた。アブラハムの兄弟なんかはここにもう移っていますから、そこに往って捜して来いと、こういうわけですから、使いはそこまでずうっと往くわけです。パダンアラムという処のハランだな。「天の神、地の神」と面白い言い方をするね、ここのところでは。天地の神、天地を創造された神だから「天の神、地の神」と言ったわけです。それを指して誓ったという。ここのところは面白いですね、創世記24章は。

5僕(しもべ)彼に言いけるは 倘(もしむすめ)女我に従いて此地に来ることを好まざる事あらん時は

即ち、選んだと思った女が僕と一緒に来ることを好まない時には、

我爾の子を彼汝が出来(いできた)りし地に導き帰るべきか

イサクを逆にこっちから連れて行ってよろしいかと言った。そうしたら、

6アブラハム彼に曰いけるは 汝慎(つつし)みて吾子(わがこ)を彼処(かしこ)に携えかえるなかれ

子供を連れて行ってはいかんと。

7天の神エホバ我を導きて吾父の家とわが親族の地を離れしめ 我に語り我に誓いて汝の子孫に此地

即ちカナンの地、

を与えんと言いたまいし者其使を遣(つかわ)して汝に先だたしめたまわん 汝彼処より我子に妻を娶(めと)るべし 8若(もしむすめ)女汝に従い来る事を好まざる時は汝吾此誓(ちかい)を解かるべし

その時はもうこの誓いを解かれて、そんなのを連れて来る必要はないと。

唯我子を彼処に携えかえるなかれ

それで来ないと言ったらダメだし、こっちから息子を連れて往くということもダメだと。自分は約束の地にとどまっている。このカナンの地にアブラハムは、そしてイサクもここで待っている。そしてハランの地にずっと往け。その見つけた女は一緒に来れば連れて来い。そうでない人はダメだと。そういうことですよ。これが神さまのなされ方なんだから、それを人間的にいろいろ考えてはいかんと、こういうわけなんだ。

10斯て僕其主人の駱駝の中より十頭の駱駝を取りて出たてり　即ち其主人の諸の佳物を

いろいろな賜物を、

手にとりて起ちてメソポタミアに往きナホルの邑に至り

メソポタメアといっても、これはパダンアラムです。メソポタメアの北部の方、今でいうとシリアの少し東の方です。アブラハムの弟のナホルの邑に行って、

11其駱駝を邑の外にて井の傍に跪伏しめたり　其時は黄昏にて

なかなか牧歌的な光景です。

婦女等の水汲にいづる時なりき

夕方に女たちが水汲みに来る。絵に出てきますが、瓶を肩にのせて来るんです。

12斯して彼言いけるは　吾主人アブラハムの神エホバよ願くは今日我にその者を逢わしめわが主人アブラハムに恩恵を施し給え

そういう女性に逢わせてくださいと。

13我この水井の傍に立ち邑の人の女等水を汲みに出づ　14我童女に向いて請う汝の瓶をかたむけて我に飲ましめよと言わんに　彼答えて飲め我また汝の駱駝にも飲ましめんと言わば

そういう親切な女性であったらば、

「お飲みなさい、あなたの駱駝にも飲ませてあげますよ」

と、そういった心根の女性がそう言ったらば、

彼は汝が僕イサクの為に定め給いし者なるべし　然れば我汝の吾主人に恩恵を施し給うを知らん

これが祈りの内容ですよ、なかなかこの僕も心がいいわけだ。そういう愛の心を持つ女性でなければダメだと。

「言われたことだけで、それでいい」

なんていうのではダメですね。

「駱駝にも飲ませてあげましょう」

というだけの気持を持っていなくてはダメだと、そういうように祈ったわけです。

15彼語うことを終るまえに

即ち祈りを終えるか終らないうちに、

視よリベカ瓶を肩にのせて出きたる 彼はアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカ
の子ベトエルに生まれたる者なり

ベトエルの娘ということです。

16**其童女は観るに甚だ美しく且処女にして未だ人に適しことあらず**

もちろん関係なんかしたことはないと。

彼井に下り其瓶に水を盈て上りしかば 17僕はせゆきて之にあい 請う我をして
汝の瓶より少許の水を飲ましめよといいけるに 18彼主よ

「主よ」と尊敬して言うわけですね、「旦那さん、お飲みください」と。

飲みたまえといいて乃ち急ぎ其瓶を手におろして之にのましめたりしが 19飲
ませおわりて言う 汝の駱駝のためにも其飲みおわるまで水を汲みて飽かしめ
ん

と言って、駱駝は何頭もいますからね、それをみんなやってくれたわけです。

20急ぎて其瓶を水鉢にあけ又汲まんとて井にはせゆき其諸の駱駝のために汲
みたり

次から次へと、十頭いたからね、駱駝は。

21其人之を見つめエホバが其途に幸福をくだしたもうや否ややをしらんとして
黙し居たり

じっと見ていた。

22**茲に駱駝飲みおわりしかば其人 重 半シケルの金の鼻環一箇と重十シケルの**
金の手釧二箇をとりて 23言いけるは

リベカに与えたと想えるね。

汝は誰の女なるや請う我に告げよ 汝の父の家に我等が宿る隙地ありや 24女
彼に曰いけるは 我はミルカがナホルに生みたる子ベトエルの女なり 25又彼に
いいけるは 家には藁も飼草も多くあり且宿る隙地もあり 26是に於て其人伏し
てエホバを拝み

即ちアブラハムの僕は平伏して神さまを拝んだ。

27**言いけるは 吾主人アブラハムの神エホバは讃美べきかな わが主人に慈恵と**
真実とを欠きたまわず 我途にありしにエホバ我を吾主人の兄弟の家にみちび
きたまえり

ここにも「慈恵と真実」という言い方をしてあります。これは新約聖書にもよく出てくるね。ヨハネ伝の初めの方に、

「キリストはその恩恵と真実に満ちている」

という。「真実」は「アーメン」という字からくる「エメツ」という字です。「慈恵」は「ヘッセッド」、正に恩恵という字です。愛とか恩恵ですね、ヘッセッドとエメツ。「誠」という

字は「言」偏に「成」ると書く。言うことが必ず成るのが誠なんです。神さまが言ったことは必ず成就する。これが誠なんです。観念的にただそれが真実であるとか何とかじゃない。理屈の上で信じるというのと違うんです。そういう「恩恵（めぐみ）と真実（まこと）」というのも、ほとんど離すことができない気持なんですね。

我途（みち）にありしにエホバ我を吾主人の兄弟の家にみちびきたまえり

そこでアブラハムの僕がリベカのお兄さんのラバンと語ることがずっと出ている。いちいち読みません。今までのことをずっと述べて、また繰り返している。旧約の記事というのはよくそういった重複がある。そこをずーっと黙読しておいてください。

●われ往かん

そうして50節、

50 **ラバンとベトエル答えて言いけるは此事は**

即ち僕が今までアブラハムに言われてきたこと、また自分が祈ったこと、その内容が実現しつつあるので、この事は既に出っくわしてしまった。別に誰なんて考えていたのではない。しかし、現実にぶつかってしまったから、この事柄は神さまから出ていると。

エホバより出づ我等汝に善悪（よしあし）を言うあたわず

この50節は大事な言葉です。神さまから出ているんだから、このリベカをどうのこうのなんて、そういう判断はいらないんだと。善悪の選択の判断はいらないということ。創世記の始めの方に蛇が、

「もし、このリベカを食べたら神さまのように善悪（よしあし）がわかる」

と言った。あの「善悪（よしあし）」も、善悪という字じゃないですよ。「何でもわかる」ということなんです。どうだこうだと、いろいろな判断はもういらない。神さまから出ていることは、もう人間の判断を超えた世界だから、こちらでどうのこうのと詮索することはないんだと。そういうことなんです。

「もう、無条件にアーメンでございます」

というわけです。

51 **視よリベカ汝の前におる　携えてゆき彼をしてエホバの言いたまいし如く汝の主人の子の妻とならしめよ**　52 **アブラハムの僕彼等の言を聞きて地に伏してエホバを拝めり**

もうはっきり言ってしまった。そこをあなた方は無条件に受けとってくださいますか。これはもう神さまに無条件に感謝しなくてはいかんというので、これも平伏してしまった。

普通の結婚は、先ずお見合いしてからどうのこうの、それから興信所で調べてみたりね、まぁいろんなケースがありますけれども。恋愛もあるし、これは恋愛でもなければ、お見合いでもない。祈って、神さまが示してくださった。そういう女性に、誰だか知らん、と

にかくそういう女性が現われてしまったから、それで祈りの内容にそっくりなのが出て来てしまったものだから、これは神さまから出たことだからといって、またそれを聞いて、リベカの兄弟も家の人も無条件に、

「善悪を言うあたわず」

と言った。

53**是に於て僕銀の飾品金の飾品および衣服をとりいだしてリベカに与え 亦其兄と母に宝物をあたえたり** 54**是に於て彼および其従者等食飲して宿りしが朝起きたる時 彼言う 我をして吾主人に還らしめよ** 55**リベカの兄と母言いけるは 童女を数日の間少くも十日我等と偕におらしめよ しかるのち彼ゆくべし**

まぁそれでもと言って、すぐ連れて往かないで、十日ばかりちょっとお願いしますよと。

57**彼等いいけるは 童女をよびて其言を問わんと** 58**即ちリベカを呼びて之に言いけるは 汝此人と共に往くや**

ちょっとリベカに聞いてみましょうと。カナンの地に往くかねと。

彼言う往かん

「往かん」と、もう十日も何もない。これが「往かん」という言葉です。「エレック」というのは、もともとはハーラックという言葉ですが、これが三人称の「彼は往く」が一人称になると、「ハー」の字が「アーレック」に変わって、これは一人称の「エーレック」という。

「われ往かん」

というのは

「エーレック」

という。まぁ暗号みたいに〔表題にヘブライ語で〕書いておいたんです。

「私は往きます、往きますよ」

というわけだ。それが「エーレック」。日本語というのは非常に表現が豊かですから、情感が表われますけれども、向こうでは発音の仕方でしょうね。音で「われ往かん」と。

59**是に於て彼等妹リベカと其乳媼およびアブラハムの僕と其従者を遣り去らしめたり** 60**即ち彼等リベカを祝して之にいいけるはわれらの妹よ汝千万の人の母となれ汝の子孫をして其仇の門を獲しめよ**

お前は選びの女だと。それで直ちに往く。「われ往かん」というこの一句が大事です。

●義と愛の結びつき

61**是に於てリベカ起ちて其童女等とともに駱駝にのりて其人にしたがい往く 僕乃ちリベカを導きてさりぬ**

これも非常に牧歌的だね。

62**茲にイサク、ラハイロイの井の路より来れり**

迎えに少し出てきたんだな。

南の国に住み居たればなり 63しかしてイサク黄昏(ゆうぐれ)に野に出て黙想(おもいはかり)をなしたりしが目を挙げて見しに駱駝の来るあり 64リベカ目をあげてイサクを見 駱駝をおりて 65僕にいいけるは

駱駝からおりてしまった。やっぱりなかなか謙遜な女性だから。

野をあゆみて我等にむかい来(く)る者は何人(なにびと)なるぞ

こちらの方に向かっていらっしゃるのはどういう人ですかと。

僕わが主人なりといいければ リベカ覆衣(かつぎ)をとりて身をおおえり

これはそういう習慣ですから、花婿を迎える時にはベールをかけるんだな。

66茲(ここ)に僕其凡てなしたる事をイサクに告ぐ 67イサク、リベカを其母サラの天幕に携至(つれいた)りリベカを娶(めと)りて其妻となしてこれを愛したり イサクは母にわかれて後

サラはもういないですよ。さびしかった。

茲(ここ)に慰籍(なぐさめ)を得たり

創世記24章というのは、そういう意味で非常に有名な章です。ゲーテが『ウェルテルの悩み』の中で、このところを想いだして書いている句がある。

「われ往かん」と、これが正に「信行」なんだ。仰ぐのではなく直ちに行動に出るわけです。相手を信じて。イサクがどんな人だか知らんですよ、その花嫁は。イサクの方も全托していて、「どんなのを連れて来てくれ」なんて言わない。みんな神さまに全托だ。全く往く方も、娶る方も、どっちもお互いに全然未知なんです。それで出掛けて往った。そして直ちに夫となり妻となる。もちろんアブラハムの僕が執り成したんです。執成しはしたけれども、お互いに全然知らない。

「結婚は斯くあれ」と言うんじゃない。斯くあれというんじゃないけれども、結婚の気合はそれぞれ、まぁ交わって、お見合いであろうと恋愛であろうといいです。要するに気合は、相対的ないろいろな判断を乗り越えた、或る一つの絶対的なものの、どっちの魂もそういったところの、お互いの本当の信というもの、これが大事です。それで、

「われ往かん」

と言う。その執成しの土台となるものは何だったかというと、やはり女性は愛である。またイサクは義である。アブラハムと召使に対して、神の示し、神の言いつけにイサクは信じてかかった。

「あなたがそういうようになさるなら、私はどういう女性だか知らんが、それを迎えましょう」

と。イサクのこの態度は義であった。

「イサク、神を信ず。それを義となし給えり」

ということが言えるわけだ。女性の方は何かというと、

「駱駝にも飲ませてあげましょう」

という愛の存在である。この義と愛が、これが結ばれるわけです。男の姿は義です。

「汝の聖意をどうぞ私を通して実現してください」

という、この義の角度。女性は自分を捧げているところの愛の心。だから結婚というのは、いわば義と愛の結びつきだよな。それで、その「リベカ」という字は「結び」という字なんです。「ラーバック」という字は、「結ばれる人」というんだね。

この義と愛が、今度は結婚の問題じゃなくて、男であろうと女であろうと、信仰的現実というものは義と愛の面を離すことが出来ない、楕円の二中心みたいなものだ。神に対して、

「アーメン、然り」

という。ここに平安がある。神に対して然りという縦の関係に平安がある。そしてそこに臨んでくるものは、実は神さまの愛なんです。これがこっちに逆に流れてくる。だから、愛が愛に流れてくる。平安のあるところに平和が来る。平安がなければ平和は来ない。

これは男であろうと、女であろうと、「人を愛する」とは「助けること、人を担う」こと。これは上から力が来るからできるんです。人間の持ち前の愛なんていうもんじゃない。この義の角度には聖霊が来るから、御霊は愛の力ですから。「然り」と言うところには必ず御霊が来る。神さまの前に自分を投げ出しているんだからね。投げ出したら神さまから力が来るんです、必ず。

玉砕すると玉成するんです。玉成ということは、そのような力が来ると、これは祈りの世界でキリストの前に自分を投げ出せば力が来るから、これが人を助ける愛となる。この力は人を倒す力じゃない。人を助ける力です。助ける力を愛という。助ける力の無い、単なる感情的な愛ではどうにもならん。愛だからもちろん感情は伴います。伴いますけれども、単なる感情ではだめ。そういうのが本当の結婚の姿であると同時に、一人びとりの姿でもある。それはもはや結婚しようがしまいが、そんなことは問題じゃない。

とにかく、この24章の物語の中で一番中心となる一言はこの、

「エーレック」「われ往かん」

という言葉。往く者は生きる、往生する。大往生。だから、「往く」という言葉は行為的な何事であっても、「往く」という言葉で表わすことができるわけです、「われ往かん」とね。

●信往一如

福音書を見てごらん。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、あの弟子どもはキリストに何か言われて、

「直ちにこれに従った」

というでしょ。直ちに従う。これは「従い往く」なんです。即ち直ちに行動に出ることが信の世界である。信ずるとは、なぜ直ちに行動に出られるかというと、信ずるとは受けと

ることなんです。信ずるとは何を受けとるんですか。キリストを受けとる。神さまの現象体であるところの具体的なキリストを受けとる。キリストの御霊を、聖霊を受けとる。これは祈りの世界で自分を投げ出す、それが本当の実質あるところの信なんです。御霊を受けとったら力を持っているから、行わざるを得ない。往かざるを得ない。ざるを得ない世界が展開してくる。「信往一如」の世界。これが「われ往かん」というこの気魄です。百％に捨て身の態勢ですから。それで、何でもとどのつまりは、この気合で往かなければ、人生は本当に突破できない。職業のこともそうですよ。

「どこへ飛んで往くかわからない。われ往かん。神さまの天国をそこへ作ってやるぞ。われ汝と共に。神さまは一緒に往ってくださる」

と。要するに相対的な運命、環境、そういうものに支配されない境地に自分の魂が動いていたら、もう自由自在になるから本当の勝利です。信仰の現実というものは運命、環境に支配されない。それをむしろ、こっちの内側から変化して行く位の力を持っている。ブラウニングの言葉に、

“Worst is the best to the brave.”

「最悪は勇者にとっては最善である」

という。それはどういうことかと言うと、本当の勇者にとっては、いわゆる相対的な善悪も善悪（よしあし）は無い、どうであってもいいんだと。それがみんな最善に変えてしまう。キリストなんていうのはそういう人ですよ。神の霊があると最善にしてしまう。

「為（せ）ん方尽くれども希望（のぞみ）を失わず、倒さるれども亡びず」

とパウロが言った。勇者とは、神さまの勇気を、キリストの力を、霊的な力を頂く者は本当の勇者です。

「われ弱きときに強し」

という本当の勇者。自分は徹底的に無力となったんですよ、弱いどころの騒ぎじゃない。

「力はありません」

と。無力が無限力となる。無者となったら無限無量者となりますから。

「南無阿弥陀仏」

この無量寿無量光の中に帰依する。

「南無キリスト」

キリストの中に帰依する。即ち、「南無キリスト」が、自分が無力となる。これが本当の「ザ・ブレイブ」（勇者）だ。一番の弱虫が一番強くなる。最悪も最善としてしまう。もう人生はそれだけの気合を持たなかったらつまらんし、またそうなったら楽しくてしょうがない。そして本当の勝利者、本当の人生の勝利者になる。あなた方はどしどし展開してください。はい、終ります。